
高校生の時間外労道（じかんがいろうどう）

よみよみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の時間外労道じかんがいじゅうどう

【Zコード】

Z4985Z

【作者名】

よみよみ

【あらすじ】

少女は、過去を変えようとしていた。少年は、未来を護る事になつた。少女は、未来を変える為に、過去を変えようとする。少年は、過去を護る為に、本来の『時間外』を生きる事になつた。同じ時間のレールの上を走りだした、少年少女二人の目的地は、違う駅になりそうだった。

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始

まりだつた。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』
全く訳が分からぬ、メールだつたが。千秋は、そのメールの重要
度を次の日？ になつてから気づくのであつた。ループ！？ タイ
ムトラベル！？ 超能力！？ とにかく常識は、4月6日に覆され
た！！

第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする、人類の英知の結晶。「あーうるさいな～誰だよ～こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

そのバイブ音によつて半覚醒状態の俺は、重い瞼を少し開ける。部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいることから推測するに残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタル表示がとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。もう2度寝をしている暇は無い。俺は一つのため息を漏らしながら、メールボックスを開く。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日四ミッション。『踏ませるな、助けろ』

はつきり言おう。訳が分からぬ。俺の睡眠時間2分を返せ
ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

「バン！」

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」

眠たい眼を右手の指で擦りながら、ため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学時代の通学に比べて、風を切る感覚が気持ちが良いと感じるのは、新生活のスタートと言つ出来事が加担しているのかもしない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしくウキウキとしていたほうが良いのかかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を一度も踏みたくないとはいっていいえ、俺だって、全く期待していなのは、嘘になる。そりや高校生だし、彼女の1人でも作りたいなんて思つてるのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目//シション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のローンメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは

俺がこれから順調に行けば3年間はお世話になるであるどう学び舎に着き、自転車小屋へ我が愛車、まだ新車でピカピカの1980円。命名『壱キュッパ』を駐車していると、校門の方から馬鹿のように、いや間違つた、馬鹿な容疑者第1号が大手を振つてこちらへ向かつて自転車を漕いで来る。

「よつおおー！ 愛ちゃん」

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かって来る悪友に、どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタツタ！ タタタツタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走つて行き、右腕で朝の挨拶のラリアツトを食らわしてやつた。

「グツトモーニング！」

「ごふ！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言つたら分かる？」 佐伯 利一
「俺の名前は、愛田 千秋あいだ ちあきだと、あと何回言えば、その頭で理解出

来る？」 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなのもからスリーサイズまで覚えて來たぜ」

「……樂に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴るうとした時、俺達の目の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、腰上位まである長髪の女子生徒がある

かつ、かわい

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「…………」

時が止まつた気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てるに昇降口へと消えて行つた。

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、『ミクズ共

「……、」

「……、」

時が止まつたきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だったと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は昇降口へと消えて行った。

「……お、おい、千秋」

その女子が立ち去つた後、利一は俺に驚いた顔をして、

「何だ、馬鹿」

「高校つて怖いな」

確かに、怖かつたが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

「コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待つてよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒に学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受けた高校を調べて、同じどこを受けたんだろうが！ 滑り止めまで、同じどこ受けやがつて。こんな奴が、俺よりも数倍頭が良いと思うと、人間はつくづく平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虚め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持つていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか」

俺は、まだ白く汚れのない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールームが始まるのは

「おらああ！」

ブン！

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を田指し、前を向き歩きながら、我が悪友に背中を見せ右手を頭上へと持つて行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そつそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言つていたが、俺はそれをスルーし。何事もなかつたように、スタスターと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなつていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1・3に入ると、いかにも、始まつた感じのういういしさ溢れる光景が広がっている。話している者、席に座つて静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでい

る者、様々だ。まだ、慣れていと、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時の思い出すな。

げつ！

俺は、自分の席。まだ名前の順なので、嫌な席。黒板を前にして右端の1番前の机へと座ると、さつき程、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、俺の後の席で静かに、本を読んでいた。

普通にしていれば、可愛いんだがな…… アイツには、関わらないようにしどう。

それから、1分程経つと、教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、愛田」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン！…ドアを開けるな、いなや、俺のすぐ右で、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリヤ？ なんで千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？ こここのクラスは、全員そろっているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所は無い。速やかに在るべきところへ帰れ。

「え？ 此処は、4組じゃ……」

一步さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あっ、失礼しました——！」

そう言って、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一の

シルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1 3 我がクラス内は、笑いに包まれた。

はあ～アイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思うが。

第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まつて一日田といつ事もあり、これと書いて授業らしい授業もせず。あつといつ間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやつて來た。

今日は、母親に作つて貰つた弁当だ、学校の売店といつのを使ってみたかったが、どういうモノか分からぬので、今日のところは無難に弁当を持つてきた。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作つて、机をくつ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日田じゃあ、まあ、こんなものだろ。

俺が弁当を鞄から取り出した時、教室のドアが開らき、朝のリプレイのように、また、利一がやつて來た。

「ちあきーー！一緒に弁当食おうぜーーー！」

少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえつた。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

嫌な間だ、仕方ない。俺は右の手のひらを額にやり、はあーと大きなため息をつくと弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食おー」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガ！

「あああー！ 脳細胞が死んだーーー」

相変わらずリアクションの大きい奴だ。

「良かつたじやないか、俺は、お前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの遺影を」

ドガ！！

「何か言つたか？」

利一は、流石に2発目のウォールアタックが堪えたのか、かすれるような声で、

「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食うんだ？」

「千秋、俺と一緒に飯を食つてくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」
変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。もうコイツと俺の交友関係はきつとクラスの連中に残念ながら知られてしまっている事だろう。

俺がそんな事を嘆いていると、

「この、シンデレメー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を押し当てやがった。

怒。怒。怒。負の感情がヒートアップ。今までのコイツの行いで
きつと、ベスト5にはランクインしそうな、行動だ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐぎやああああ

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、
イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、

「はい！」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、
取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちこあわ

わざとだらうが、女々しい声で俺の名を呼び、

「最近俺に対するツツコミが激しそぎやないか？」

「何言つているんだ、利一はドミだから喜んでいるんだろう？」

俺は、邪氣の無い口調で利一に言った。

「いや、俺はドミじゃないからな、それとも少し柔らかく、ツツコンドモいだらう？」

「そんな風になつたら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構うんだ？ 構うことでも他の構い方が在るだらう？」

「ツツの俺に対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だつてさ 千秋優しいじゃん

「はあ！？」

不意な言葉に少し動搖しました。

「俺のどつ、何処か優しいだよ」

「俺なんかに構つてくれるしさ 不意な言葉にそんな驚くし。素直じやん」

「ツツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

ちょっと声に感情をこめて言つたが、
「顔が赤くなつてゐるぞ~」

「照れて無い、言つてるだらう。」

そんな事を言つているが、若干頬が熱い氣もする。もしかしたら顔が赤くなつてゐるかもしだれない。こんな事を面と向かつて言われるのは苦手だ。

にやにやしながら俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

俺は、このまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思い、無理に話しの流れを変えた。

「せつかく高校生になつたんだから、決まつてるじゃんか。天氣も良いし、屋上で昼飯つて、俺、やつてみたかったんだよなー」

目を輝かせて、言つ利一。

「おいおい、屋上つていつたら、不良のたまり場つてイメージしか無いんだが

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だつて、今、平成何年だと思っているんだよ、そんな絶滅危惧種居る訳が」

そして、屋上の鉄の扉を開けると、心地の良い風が、髪をなびかせたと思つたら、目の前に在つた光景は、煙草を咥えた、不良4人が立つていた。

絶滅危惧種居た――――！

第4話 屋上

そして、屋上のドアを開けると、氣持の良い風が、髪をなびかせた
と思ったら、目の前に在った光景は、煙草を咥えた、不良4人。

絶滅危惧種居た――――！

「あん！」

俺、一般高校生と、一般変態性を睨む、不良。

俺達は、不良達に聞こえ無いよう、囁くように口にして、

「おい、利一、あんだって、『あん』」

「『あん』って何だよ、俺の知っている『あん』って、あんこの『餡』と、こないだ見た、保健のDVDで観た、女の人の喘ぎ声の『あん』しか、知らねえよ」

「アレじゃねえか、外国語じゃね？ どつかの国の挨拶的な」

「あんな、怖い顔で睨む挨拶する、国が在ったら、もうその国終わ
つてるよ、北〇鮮も真っ青だよ」

そんな、話を男達に聞き取れないくらいの声で話しをしている
時、俺は、二つ間違つている事に気付いた。そこに居るのは6人だ
と。不良らしき一人が、何故か分からぬが、うつ伏せに倒れてい
て動かない。もう一人は、不良4人に囲まれている、女子生徒がい
ることにだ。

男4人が黒く分厚い本持つた、女子生徒を囲んでいた、そして、
ソイツは、朝、俺達に毒舌を吐いた女子であり、俺のクラスメイト
だ。一時間目のホームルームでの自己紹介をした時にアイツだけは、
覚えた。記憶力は、悪いほうだが、迫力のある苗字と、自分の名前
と一文字被つっていて何より、初対面で毒舌を吐かれたのだから、意
識をしなくても、頭に残つてしまっていた。

「鬼塚 千尋……」

「おにづか ちひる

「そう俺の口から、自然にこぼれた。

「ちょっと、貴方達、臭いから、消えてくれないかしら」

男4人に囲まれた状況で鬼塚は、全く怯むことなく。男達に言葉を浴びせる

「あん、何だ、このアマ！」

また『あん』だ。

「ああ、そう、貴方達の、そのちつぽけな脳じや、今の言葉を理解出来なかつたのね。御免なさい、じゃあ、訂正するわ、そここのフエンスから、飛んでくれないかしら？」

『おい！ 煽つてどうするつもりだ？』『勝ち田何かないだろう』普通なら、そう思つところだろうが、俺は、男達よりも、鬼塚の方が、怖く感じた。

「おい、どうする？」

利一が俺の耳元で囁く。

『どうするつて、どうにかして助けるに』

ドガ！

一瞬、鬼塚から目を離した時、何か、鈍い音がしたと思つて、鬼塚のを含めた男達の方を見ると、鬼塚の前に居た男が、のけ反るような格好で空中に居た、足が屋上の床から離れている、いや、飛んでいる？ 鬼塚の右手は、縦方向に本を向けて、大きく上げていた。そこで、ようやく俺は理解した。鬼塚がこの分厚い本で男の顎を吹っ飛ばしたのだと。

「ガツ」

ドガ

そして、男は、その場に仰向け倒れ込んだ。動かない。痛いなどの声が出るのかと思いきや、ぴくりとも動かない、どうやら、気を失つたらしい。他の3人も倒れた男を見て動かない、動揺しているのが表情から読みとれる。俺と利一も動かない。そして、次に動いたのが、鬼塚だった。

女とは、思えない身のこなしで、男達の元へ飛び込んでいき、本で蹴散らして行く。

そして、1分後その場に立っていたのは、鬼塚一人だった。圧倒的。まるで、大人と子供の喧嘩のようだつた。

第5話 就寝

そして、男4人が倒れている場を悠々歩き、出入口つまり、俺達の方向へと歩いて来る。

「全く、人がせっかく、静かに昼食を取らうとしてたのに、飛んだ

邪魔が入ったわ」

俺と、利一の間を通り、鬼塚に俺は、

「おい、コレどうするんだよ、ちよつとやり過ぎなんじゃないのか

？」

その言葉を聞き、足を止める。

「これから、教員に言つて、来るわ。まあ、最低でも、停学、悪ければ退学かもしれないわね」

自分を自嘲するかのように、少し笑う鬼塚。

「別に後悔は、しないわ。あと、やり過ぎ？ 知つた風な口を聞かないでくれないしら、そいつらは、私の夢を汚したのよ」

そう言つて、鬼塚は、階段を降りて行つた。

「ふう～おかねえ～」

緊張の糸がれたらしく、利一が言葉を漏らす。

「それより、飯は、どうすんだよ。こんな惨劇の現場で俺は食いたくなーぞ」

利一は、何も見ずに。

「昼休みは、あと、22分37秒あるけど」

「仕方ねえな、教室に戻つて食つか

「えーーー」

遠足が中止になつた、小学生みたいな顔をする利一。

「やめろ、気色悪い。だまつて、教室で食つてる」

そう言って、俺達も階段を降り始める。その時、俺は、朝のメールの事を思い出した。

「そうだ、利一、このメールを送ったの、お前じゃないよな？」

俺は、携帯を取り出し、画面を開き、利一に見せた。

From 不明

Sud がんばれよ。

「田中リッシュン。『踏ませるな、助ける』

「ん、何だコレ？ 訳分かんないな

「宛先不明なんだよ、俺はお前の悪戯じゃないかと思つていいんだ
か」

「俺じや無いよ、俺だつたら、千秋に送るんなり、もつと可愛く『
コレーションしてやるぜ』

親指を立て、自信ありげに言つ利一。マジ氣持ち悪い。どうやら、
「イツでは無いらしい。

「ああ、食欲無くなつて來た」

「えつ、何で？」

俺は、利一の胸ぐらを掴んで、
「お前のせいだよ

ドガ！

利一の額に頭突きを食らわして、一足早く、階段を降りる。

「じゃあな、黙つて、一人で飯食つてろよ、お前は、喋んなきゃ普通
通なんだからよ

「痛てて、分かつて無いな千秋、俺が変なのは、お前の前だけだよ

「お前今日、家に帰つても、家があると思つなんよ」

「それどういう意味！？」

それから、何だかんだで、利一は、何故か俺の教室で飯を食つて、何も特に変わつた事も無く、学校も終わり家に帰つた。

時刻は、23時40分。あと20分足らずで、4月6日も終わる俺は、眠くなり、いつもよりも少し早いが就寝することにした。春休みボケがまだ抜けて無い事もあるし、馬鹿の相手をして疲れた事もある。高校が始まつて間もないと言つて、色々な事があつたな。

俺は、ベッドの布団の中に潜り込むと、あつといつ間に、意識が無くなつた。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。「あーうるさいな～誰だ！　こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝のようだ。

俺が寝こんだまま、布団から手を伸ばし枕元にある携帯を開けてみると、6時58分をデジタル表示がとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう一度寝を

している暇は、無いみたいだ。

携帯には、新着メール1件。宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日11時11分。『踏ませるな、助ける』

「また？ 誰だよホントに」

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

俺は一つの違和感、異変を感じた。そして携帯の日付を見た時、それは確信に変わった。

4月6日？ おいおい、携帯がぶつ壊れたのか？ 今日は4月7の筈だろ……

第6話 4月6日

4月6日水曜日？　おいおい、携帯がぶつ壊れたのか？　今日は4月7日木曜日の筈だら……

俺は、2階の自分の部屋から、1階のリビングにかけ降り、テレビを見た。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

妹が朝食を取っていたが、そんな事は、関係無い。俺はテレビのリモコンを回す。

ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、

「ちょっと、お兄ちゃん、私がテレビを観てたのに～」

そんなことを妹が言っているが、今はお構いなしだ。そして、天気予報をやっている番組で俺の指は、止まる。

「今日、4月6日の予報は、関東地方を中心に快晴」

なっ！？　今日は4月6日！？　おいおい、アナウンサーの間違いか？　それともこれは、録画か何か！？

俺は、台所へ行き、朝食の支度をしている母さんに

「母さん！」

「どうしたの、そんなに慌てて？」

「まだ時間は、あるでしょ、まあ、昨日、入学したばかりで、落ち着かないのは分かるけど」

昨日？　一昨日の筈だろ　昨日はもつ普通に学校へ行って、利一を殴つたりして、鬼塚が、不良をやつけるといふを見たりした筈だ。

「昨日が、入学式ー？　一昨日じや無くてー？」

「なに寝ぼけているの、昨日は、私と一緒に、入学式へ行つたじゃない」

アレが夢？ アレが夢ならハイビジョンブルーレイも真っ青な高画質だぞ。

それから、今日だされた朝食も昨日と全く同じモノだ、テレビでやつてているニュースも昨日観たモノと一緒にだ。

その後俺は、まだ事態を把握していないが、親も居るし、家に居ても進展が無いと思い、学校へと向かつた。

自転車を漕ぎながら、情報を整理して、俺は、一つの結論を出した。

アレは、夢だったのか？ はは、そうだよな、夢だ夢。シークムント・フロイトさんも、確かにこんな語録を残していたし「夢は現実の投影であり、現実は夢の投影である。」で在るつて言つてたし、まあ意味分かんねえけど。頭ではこの異常事態を解つてゐるが、俺は現実逃避をして、自転車を漕ぐ。気分の問題なのか、体調が悪いのか分からないが、足は重く感じた。

第7話 人間時報

そして、学校へ着いた俺は、自転車小屋に自転車を置いている。確かに夢だと、ここで、校門の方から利一が馬鹿みたいに

「よつおおー・愛ちゃん」

そう言しながら、俺の方へ自転車を走らせる、利一。

んな、馬鹿な！ あれは、夢だつた筈だろう、なんでここまで一緒なんだ!? デジヤブとか既視感なんて、レベルじゃあねーぞ！ 今日とこいつ時間が経つたびに、夢のいう逃避を壊されていく気がした。

俺は自転車を漕いできた利一をスルーした、利一は、不思議そうな顔をしている。そりやそうだ、いつも俺なら何らかの、アクション起こしていった筈だ、現に、あの時は、ラリアットを食らわしてやつた。

自転車を置いた、利一が、俺の元へ歩いて来た。

「どうしたんだ千秋？ いつもと違うぞ、体調でも悪いのか？」

俺は、ふと思つた、「コイツなら

「利一、今は何時だ！」

利一は、何も見ずに、

「8時24分も26秒を回つただけだ」

「違つ、何年、何日、何時、何分、何秒で聞いてるんだ！」

「なんだよソレ、どうかしたのか？」

「いいから、答えてくれ

「ああ」

少し戸惑いながらも返事をする利一。

もし、世界中の時計が狂つたとしても、コイツだけは狂わない筈だ。
それくらいに、俺は時間に対して、利一に信頼している。

俺は、携帯の電波時計の表示に見ながら、利一の言葉と、照らし合わせる。

「今日は、201×年、4月」

もし、利一が全部合つてていたのなら、俺の記憶を夢だと信じられる。利一が4月7日だと言えば俺は、俺は世界中の時計よりも、利一を信じる。あいつが時間を間違える筈は無い。何故なら利一は、人間時報。完璧な体内時計を持つ人間だ。俺は、中学から利一を見てきて、今まで間違つた事など一度も無かつた。

「6日 8時24分も52秒を回つたとこだけど？」

俺は、甘く見ていた、利一は、完璧な体内時計を持つ人間。7日か6日で俺は、この事を判断するつもりだった だが結果は、ありえない方向へと向かつた。

利一が8時24分も52秒と言つた時、俺の携帯の電波が示していた、時間は、8時25分54秒。1分2秒も誤差がある。

「利一、携帯を貸してくれ」

「えつ何でだよ？」

さつきから利一は、ずっと困惑氣味だ、状況が読み込めて無いからだ。

「お前の時計と、俺の時計を見比べたい」

利一から、携帯を借り、自分の携帯と時刻を見比べる。もしかしたら、やはり俺の携帯がイカれているじやないかと思つたからだ。携帯は、同じ時刻を指していた。

「利一、お前が携帯、どっちかの時計が狂つているぞ」

「はあ？ そんな馬鹿な

利一に携帯を返す。

「！？ アレ」

利一も驚きを隠せないみたいだつた。

「どつちが、正しいか、分かるか利一」

目を瞑り、集中する利一。

「俺だ……俺が間違つていた」

まさかと思つたが、利一が間違つていた 頭が痛い、重い。

「利一……俺、ちょっと頭痛いから、保健室へ行くわ」

「おい、大丈夫か。顔色メッチャ悪いぞ」

「氣遣うように、言う利一。

「ああ、大丈夫だから、早く教室へ行つてくれ」

「一緒に寝てやうつか?」

さつきと同じように、氣遣うように、氣持ち悪い言葉を口にする

利一。

「俺と法廷で戦いたいのか!」

安心した顔で利一は、

「うん、そうじやないとな、千秋は」

「じゃあな、教室に行くから、ゆっくり休めよ」

そう言って、利一は、教室へ向かつて行つた。安心したのは、俺
もだ。取りあえず、利一は、利一だつた。

第8話 保健室で考察

俺は今保健室で、ベッドに寝ている。頭が痛いと言つたらすぐにはベッドを貸してくれた。今、保健の先生は、出かけて居なくなり、保健室は、俺一人だ。静かな保健室に掛け時計の秒針の針の音が、力チ力チと鳴り響く。

俺は、ベッドに横たわり、頭の中で、最初の4月6日と、今の4月6日について、整理をする事にした。

まず、俺は自分の頬に右手を持つて行き、一応確かめた。

「痛い」

軽く、涙が出そうになった、色々な意味で。

この異変に気付いているのは、どうやら、俺一人みたいだ。妹も母さんも、普段と変わらなかつたし、完璧な体内時計を持つ利一でさえ、この異変に気づいていない。恐らく気づいているのは俺一人だろう。何故俺だけが気づいているのか、これも謎だ。

そして最初、つまり、1回目の4月6日に何かが在つたと考えるのが妥当か。やはり1番怪しいのは、このメール。

俺は、携帯を開き、メールボックスを見る。

From 不明

Sud がんばれよ。

1回目ミッション。『踏ませるな、助ける』

怪しそうだ。宛先が不明なところが特にだ。がんばれよ、1回目ミッション。『踏ませるな、助ける』これが何を意味するのかだ、1回目つてのは、学校が始まつて1回目つて事か？ ミッション、つまり、する事？ 踏ませるなど、助ける。どちらも主語が無くて、全く分からぬ。

そして、おかしな点は、今日、つまり2回目に利一が、時刻を外した事だ、いや、もしかしたら、1回目の時もすでに、外していた

可能性もあるが、もう確かめる術は無い。

幾つかの可能性が生まれた。自分がおかしいのか、世界がおかしいのか。

もし、利一が、時刻を外さなければ、俺は、自分がおかしいと結果を出していたかもしだれないが、このタイミングで、利一が時刻を外すのは、偶然では、無いと思う。

つまり、おかしいのは、この世界。そして、今の状況から、考えられる事は、今、俺、もしくは、世界が。『今日という、4月6日を2回繰り返している』、簡単に言うと『ループ』している、これが、俺が考えている中で、一番辻褄が合った。

この最初の記憶は、1回目の4月6日。そして、今が『2回目』という事か。なんともまあ、SFな答えが、出て来たモンだ。自分で出した答えに、俺は少し笑ってしまった。だってそうだろう、今まで、平凡に人生を謳歌してきた、奴がいきなり、こんな、サイエンス・フィクション、まるで、漫画や、アニメ、映画、ゲームのような、絵空事に巻き込まれてしまふなんて 神様でも、仏様でも良いが、配役のミスじゃないか？ 俺は、その辺に居るモブキャラだと思っていたが、こんな、主人公クラスの出来事、俺には、荷が重すぎる。代つてくれる奴が居るのなら、この役を代つてもらいたい。

我ながら、余りにも情けない愚痴をこぼしたが、助けてくれそうな奴は居ない。こんな事を話しても、信じる奴など居ないだろうし、下手したら、精神病棟へ入れられてしまう可能性もある。全くどうしたモノかな。

待てよ、このまま、何もせずに、明日を迎えるとしたらどうなるんだ？ また、4月7日には、ならず、また、4月6日を繰り返すのか？ 分からないな

ガラ！

「頭は、どうだ――！ 愛ちゃん！」

ドアを開け、けたたましく、現れたのは、言つまでも無い。

第9話 チョココロネ

「頭は、どうだ――――！ 愛ちゃん！」

保健室のドアを開け、けたたましく現れたのは、言うまでも無いか。

「お前のせいでの、また痛くなってきたよ」

俺は、立ちあがり、そばに在った台の上から、消毒液の容器を持つて利一の元へ行き、口に容器を突っ込んでやつた。

「お前、いつも、大きな声を出して、喉が大変そうだから、消毒してやるうか？」

「ふいません、ふいません」

そして、俺は、容器を口から離して、
「で、何の用だ」

「「ホホホホ！ なんの用だじゃないよ、せっかく、昼休みで寂しい
だらうと思つて、一緒に食べる為に、弁当を持つてきたのに、ほら
あ、千秋の好きな、チョココロネもさつき購買で買つて來たぞ」

そう言いながら、笑顔で、弁当箱の入つた袋と、チョココロネを見せる、利一。さつきまでの、SF的空気が、「コイツが来ただけで
一気に崩れた。少し古いが、KY（空氣読めない）が在るが、コイ
ツの場合KY（空氣壊す）だな

「おいおい、ここで飯食つても良いのかよ」

「大丈夫だ、さつき先生に聞いて来た、軽くなれば食べても良いって
そういうながら、近くの机に、弁当を広げる、利一。

「それって、軽くつていうのか？」

「人によって、軽いや重い、その他色々の価値観は、変わる。俺に

とつてこれは、軽いから、問題ナッシング！」

親指立てを二ちらに見せる。口イツを見ると、なんだか和むなああそつか、確か、動物が可愛く見えるのは、自分よりも馬鹿だからつて、聞いた事あるな。そんな感じか。しかし、この馬鹿は、勉強が出来る。前言撤回だ、ああ、そう思つと、やつぱり腹立つてきた。

まあ、確かに、いつの間にか昼休みで、朝も、色々あつてろくに食つて来てないから、腹ペコだ、俺も、利一の前に座り、バックから、弁当を取り出した。

「「いただきます」」

飯を食べだして、すぐに利一が、

「千秋、さつき、職員室に行つた時にさ」

ああ、此処で、飯を食つて良いか、聞きに行つた時か。

「屋上で、何が在つたらしくてさ、先生達が慌ててたんだよ、どうやら、話しを聞いて察するに、屋上で喫煙をしていた男子5人が、女子に乱暴しようとしたら、逆にやられたとか、どうたら、こうた

「う

その話しを聞いてすぐに、俺は、分かつた。

「その女子つて、鬼塚つて名前じやないか？」

「えつと、女子かどうかは、分からないけど、確かに鬼塚つて名前

は、確か言つてたなー」

「どうやら、2回目の世界でも、鬼塚は、男子に絡まれて、勝つたみたいだ。」

そして、俺は、飯が食べ終わり、5時間目は、普通に授業に出で。特別に何かする訳でも無く、学校が終わって、家へと帰った。

第10話 枕でため息

学校が終わって、重い足取りで家に帰った。

そして、今は、4月6日。23時33分。
俺は、自分の部屋のベッドで仰向けに横たわり、頭の中を整理している。

もし、これで、また4月6日に戻つたら、恐らく何らかのアクション起こさないと、4月7日を迎える事はないだろう。もしこれで何もせずに、4月6日を迎えられたら、ただの夢だった事で、笑い話で済むんだけどな。

メールの内容の、『踏ませるな、助ける』きつとこれが何らかの鍵になつていてると考えるべきか、まずは、何を『踏ませるな』って事を考へる事か、『踏ませるな』コレは、俺に対して言つてている言葉で、『何かを踏ませるな』って事か？ 俺自身に言つているのなら『踏むな』になつている筈だ。

一体何を踏ませないようにするべきのか？ 1回田、2回田と、俺の周りで何かを踏んだ奴なんか、俺の知る限りは、居なかつた。つまり、もつと視野を広げる必要があると言つ事か。

俺の行動によつて、この4月6日は、大なり小なり確實に変化する。1回田と2回田では、大分内容が変わつた。もし、今日、2回田を1回田と同じような行動をすれば、恐らく2回田の内容は、1回田と酷似する筈だ。

このメールの『踏ませるな、助ける』は、本来なら、何かが、踏まれるモノを踏まれないようにしろ、助けられなかつたモノを助けろ、そういう意味か？ それが、ループを解く鍵なのか？ そうだ

と、考えると、まずは、これが何かを特定する必要があるな……はあ～何で俺が、こんなに頭を使わんといかんのだ、俺は、頭がつても、悪いんだぞ。あの高校が受かったのでも奇跡だつたのに。あ～あそこで運を全部使い果たして来たのか？

ため息をつき俺は枕に顔を埋める。

顔を枕からお越して部屋の掛け時計に手をやると、時刻は、23時58分。

あと2分で今日も終わる。2分経つたら、どうなるか、これで、ようやく、内容が大体分かるだろう。もし、4月7日になれば、ただの笑い話だ。もし、また4月6日になれば、確実に世界、もしくは、俺がループしてると、確認が得られる。4月6日に戻ったのなら、俺は、ループを解かなければいけなくなる。流石に、何日も同じ日を繰り返してられるか。

そして、それを解く鍵が、あの謎のメール。これは、ラッキーと思ふべきなのか？　あのメールが無ければ、確実に暗礁に乗り上げてた筈だ。

そして、時計の針が、12を指すと同時に俺は、意識を失った。

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

一日田ミッション。『踏ませるな、助けろ』

第1-1話 黒くて分厚い本（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第1-1話 黒くて分厚い本

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。携帯には、『新着メール1件』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

一日三ツシヨン。『踏ませるな、助ける』

時刻は、6時58分。携帯は、4月6日を指している。

俺がやらなきゃいけない事は、まず、『踏ませるな』をなんだか特定することだが、『助ける』俺が変えなきゃいけない事は、1回目、2回目と同じことが起こっている事の筈だ、それを踏まえ、俺が『助ける』で、一番最初に連想したのが、不良に絡まれている鬼塚だ。まあ、不良から助ける必要も無いように見えるが、女子が男子に絡まれているんだ、それを助けるって事が、『助ける』が示している事の可能性は在る。そして、恐らく、助けるの前にやらなきゃいけない事が、『踏ませるな』。その何かを踏ませてしまつたら、また、4月6日に逆戻りつて事になるだろう。

ジリ

目覚まし時計が鳴った瞬間、俺は、すぐに止める。

「今日も面倒な、4月6日になりそうだ」

俺はベッドから起き上がりカーテンの隙間から漏れる朝日を見て、呆れ気味に呟いた。

学校へ自転車で向かう俺は、今日、一つの可能性にかける事にした。1回目、2回目の出来事の中で、一番印象に残っているのは、

「アイツ、『鬼塚 千尋』だ。そして、アイツは、不良に絡まる。

『踏ませる、助ける』の『助ける』意味は、鬼塚の事を不良から助ける事だろうと言うのが今の俺の変考えだ。だけど『助ける』の前に、『踏ませるな』が在る。昼休みに、鬼塚が絡まれるところを助ける前に、何か、踏ませないようしないとならない。

『踏ませるな、助ける』の助けるが、鬼塚の事なら、踏ませるな、も鬼塚に関係ある可能性もあるな。

俺が、今日。3回目。4月6日にする事は、鬼塚の観察。ばれたら、あの強烈な奴だから、何されるか、わかつたもんじゃ無いな。メタギのスネ○ク並みに気を付けなければ。

取りあえず今日、3回目は、馬鹿（利一）をスルーし。鬼塚を観察することにした。

ホームルームが始まる前の時間、鬼塚は、1回目と同じく、独りで本を読んでいる。黒くて、分厚い本だ。なんの本だろうか。もしかして、デスノ○トじゃないだろうな。まあ、冗談は置いといて。

それから、1、2、3、4時間が過ぎ、昼休みの時間がやつて来た。鬼塚は、授業が終わると、弁当の袋を持って、教室を出て行つた。俺もすかさず後を追つ。

予想通り鬼塚は、階段を上つて行き屋上へと、入つて行つた。俺もそれを確認し、階段を上つて、屋上へ入ろうとしたが、俺の前に、4人組みの男子生徒が、屋上へと入つて行く、この顔は覚えている不良達だ。俺は階段の隅へ行きその場をやり過ごした。屋上へ入つて行つた。俺は、屋上のドアを少し開け、中の様子を窺う。グランドを向いて座つて、お弁当を広げようとしている、鬼塚に向かつて、不良4人が、煙草をふかしながら歩いて行く。

「何してんだよ、テメー1年か？ 此処は、俺達のたまり場なんだよ、どつかへ消えろよ」

「つるさい、貴方達が、消えなさい、生ごみが

「んだと、コラ一変な本を置きやがって」

一人の男子が、座つて いる鬼塚の隣に置いてあつた、黒い分厚い本を『踏んだ』。

鬼塚は、その男を、物凄い形相で睨んだと思ったら、踏んでいる、足を蹴り飛ばし、そして、倒れた男を踏みつけた。

そして、本を持ち、男達に囲まれる、鬼塚。この光景をは、俺は、前に見た事があつた。そうだ、分かつた、1回目は、この場面で俺と利一が来たんだ。

そして、その後は、1回目と同じように、鬼塚は、男達を蹴散らして行つた。

そして、3回目。4月6日の23時58分。

自分の部屋で俺は、考える。いや、もう、やる事は決まった。

『踏ませるな、助ける』これは、きっと鬼塚の事だ、そして俺がやらなきゃいけない事は、本を踏ませなによつにする」と、不良から、鬼塚を助ける事? の筈だ。

今日、学校が終わつてから、あつた急遽在つた職員会議を、俺は、廊下で盗み聞きしきた。このまま行くと、鬼塚は、停学処分になるらしい、だとしたら、それから助けるという意味の可能性もある俺の意識は、ここで途絶えた。

俺は、携帯のメール受信のバイブ音により目が覚めた。モチロン、時刻は、4月6日6時58分。

携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日田川シラション。『踏ませぬな、助ける』

全て予想通り。いや、いつも通りだが、これも今日で終わにしてやる。俺が、今日やる事は決まっている、鬼塚の本を踏ませないようにして、鬼塚と不良の喧嘩を止める事。

なんとなく、携帯で今日の星座占いを見た。悪気つけだ、4回目で初めてだったが。

運勢は、12位。新たな、出会いがあるかも。

「12位か、全くついて無い1日になつそうだ」

第1-2話 着信

「1-2位が、全く、ついて無い1日になりそつだ」

そして、4時間目、昼休み。

当然のように鬼塚は、教室を後ににする。そして、俺は教室を出ようとするが、利一が、弁当を持って、俺の教室に入つて来た。計算通りだ。

「おっ、千秋、何処行くんだ？」

俺は、利一の肩に手を置き、

「利一。職員室へ行つて、先生達屋上へ呼んで来てくれ」

利一は、驚いた顔で、

「はあ、何でだよ？」

「さつき、小耳に挟んだんだ、屋上で今不良が煙草を吹かしているつて」

「千秋、相変わらずだな、お前は「
やれやれといった感じで言う利一。

「いいから、頼むぜ、親友」

そう言って俺は屋上へと走る。利一もさつきの言葉が効いたのか、凄いスピード、廊下を走つて行った。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

最近、運動不足だな、脇腹が痛い。階段を走つて登るのが、こんなに辛いとは……まだ、踏んでくれるなよ『あん』の奴ら。踏んだら どうなるか、また戻るのか……

そして、屋上のドアを静かに開けて、目に入ったのは、座つてい

る、鬼塚と、それを囲む5人の煙草を咥えた不良。良かつた、まだ本は、踏まれていない。俺は、鬼塚方に向かって走る

「つるさい」、貴方達が、消えなさい、生ごみが「

ちくしょう、3回目と同じだ、この後、不良が、

「んだと、「ラー！」変な本を置きやがって」

足を上げ、本目がけ、足を振り下ろす男子。

「させえるかあー！」

ふざけんじやねえぞ。もう沢山だ、終わらしてやる、4田6田を。永遠に生きたいと思っている程、俺は、強欲じやねえだよ。あと、

数十センチ

俺は男達の中へ潜り込み、本を間一髪、掴んで、鬼塚の手も握り、男達から距離を取った。

「ちょっと、貴方何、勝手にの人手を握つて。ちょっと、どいてくれるかしら、あの単細胞な、馬鹿に、赤色でも見せよつと思つているんだから」

「あん！ 何だテメーは、ソイツの連れか？」

「おいい！ 煽るなよ。てか、アイツまた、アンだよ、ホント意味知りてー、グ格レば出て来るのか。とつ、そんな事、考えている、暇は無い。

「まあ、取りあえず、礼は、言つとくわ、ありがとう。だから、その本を返してくれるかしら」

「ああ、分かった」

俺は、小声で、

「ちよつと、待て！ 本を返しても、お前、あいつ等に手を出すな

「あ

「なんで、貴方の言つ事を聞かないといけないのかしら？ 疑問だわ

イラついている様子で俺に言つ、鬼塚。

「なんだつて、お前が手出したら、あいつ等、病院送りになっちゃうだろ」

不良達を指さして、大きく叫んでしまう俺。

「な！？」

俺の言葉に驚いている不良達。だがお前達は知らないかもしけないが、コイツは、それ位の戦闘力を持つている。お前ら、3回中、3回とも、ソックファウ¹でからぶ。

「だから、下手に、手を出しても前が停学とか、退学になつたら、馬鹿らしげだろ?」

「そりね、確かに、その通りかも、知れないけど、アレは、どうするの？ 私達の意思に関係なく、向こうでは、やる気満々みたいだけど」

確かに、不良達は、今にも、襲いかかってきそうな、勢いだ。

「じゃあ、私は、何もしないから、貴方がなんとかしなさいね、ヒー

塚。

ほおー、女を庇うなんて、いい度胸してゐるじゃないか」「

じわじわ俺との闇合いを詰める良5人。どうする？ どうする？
俺に「イツらを相手に出来る戦闘力なんて、ないぞ！」

逃げれば、ループ。逃げなきゃ、殺られる。

どうすればいい? どうすればいい? どうすればいい? どうすればいい?

うはい うはい うはい うはい

ればい。

そして、出した結論は。

はは、いひなりや、玉碎覚悟だ。俺は、もうどうにでもなれ、思つた其の時。携帯のメールが来てバイブが鳴り、ポケットから右足

へ振動が伝わった。

第13話 添付ファイル

はは、じつなりや、玉碎覚悟だ。俺は、もうビビりでもなれ、思つた其の時。携帯にメールが来てバイブが鳴り、ポケットから右足へ振動が伝わつた。

ちくしょう誰だ、こんな時に、俺が携帯に田をやるとソレは宛先不明だつた。

！？ 俺はすぐにメールを開いた。その中には、

From 不明
Sud 『格闘技』

使用限界10分。ファイルを開き耳に付ける。

なんだ!? このメールは、だが今はそんな事を考えている場合じゃない。あの宛先不明のメールだ、これはきっとこの状況の打開の策だと信じ、おれは言われた通りにメールに添付されたファイルを開き携帯を右耳へ当てる。

「何だ？ 助けでも呼ぶのかあ？」

右耳に携帯を当てる、機械的な女性の音声のようなモノが何かを言つている。

「ダウンロードファイル格闘技。 使用限界10分」

そんな音声が聞こえると、俺の頭の中に何かが流れようの感覺が広がる。映像と言葉。つまり情報が一気に頭に流れて來るのが分かる。もしかしたら死ぬ前に見るという走馬灯は、こんなモノなのがもしれない。

少しの間思考が停止した気がした。

「死ね、オラああッ」

一人の不良が俺の左頬に向けて、右拳を繰り出す。俺が反応出来る筈の無い速度で

「はあッ」

意識が戻った……違う、今までと違う自分なつた。

ドガ！

「ぐオツ」

俺に向かつて來た、不良は俺の左横で倒れて蹲っている。動かない、どうやら氣絶しているみたいだ。

何が起こつたか、俺が把握するのに数秒かかった。そして、分かつたんだ。『俺がやつたんだと』俺は、無意識にいや、きっと自然に、まるで熟練された格闘技のスペシャリストが、咄嗟に襲われた時、自らの技を使用し相手を蹴散してしまったような、そんな自然な事が、不自然にも、俺に起こつたんだ。

俺は、不良が放つた拳を見極め、その手首を、右手で掴み、柔道いや違う、俺の知つているのだと、柔術の技のように、捻り上げ、相手の体制が崩れたところへ、右足をかけ地面に叩きつけただ。

それを見て驚いて動きが止まっていた残り3人不良達が、一気にかかつて來た。

俺は、3人が自分に到着する前に、自分から飛び出して、自分が見えて一番右に居る不良へ飛び込んだ。

「！？」

右拳をしたから斜めへと不良の顎へと放つ。体の回転するのが分かる、的確なタイミングでステップを踏みこんだのが分かる。きっと自分がこの姿を第三者の視点で見ていたのならきっと、プロボクサーかと思う程の美しいホームだと思うだろう。

俺の右手は的確に不良の顎にヒットする。だが余り感触は無い。スッと抜けたような感触が手に残る。

殴られた男は、その場に崩れるように、膝を着き、そして床につ伏せに倒れ込んだ。倒れる時には、もう意識が無かつたのか、手を着いたりもせずにまるで、糸の切れた操り人形のように。

残り一人は、それでも俺に向かつて來て、一人が俺の左脇腹に向

かつて蹴りを繰り出す。避けれるスピードだったが、俺はその足を両手で受け止め、ソイツを持ち上げまるで、日本刀の抜刀術のように左から右へ振り、残り一人に向かってぶつ飛ばし、手を離す。二人は四メートル程吹き飛び、倒れ、そのまま沈黙した。

そして、静かになつた屋上を見渡す。立つているのは俺と鬼塚だけだ。

自分で倒した、四人を見て体が震える。

なんだコレは！？ 何なんだ！？ こんな力、俺は知らないふつと俺は、鬼塚の方を見る。自分はどんな表情をしているのかさえ分からぬ程、動搖している。鬼塚の顔を唖然と驚愕が足したような顔だった。

鬼塚の顔を向いてすぐに、俺の頭にまるで電気が走ったかのよくな痛みが走る。ただの頭痛とは違う。脳みその中から、針で刺されているかのような痛み。

俺は痛みに耐えかね頭を抱える。そして、膝をついてその場に倒れた。意識が途切れる少しの間、誰かの声が聞こえたような気がした

第14話 辻

俺が目を覚ますと、どうやら何処かのベッドらしいとすぐに分かつた、暖かい掛け布団とマットレスの感覚がなんとも心地が良い。薄く開いた瞼をさらに広げると此処が何処なのかが分かった。二回目の4月6日でもお世話になつた保健室のベッドの上だ。

俺が起き上ると、ベッドの横のパイプ椅子に座つて、利一の姿が。

「おっ、目覚め覚めた?」

「ああ」

まだ、良く状況が理解してなかつたが、数秒送れて思考が覚醒した。

「今、何時だ?」

掛け時計が確か保健室に在つたと思ったが、利一が居るのであって利一に聞いた。

「今は、5時17分31秒を回つたところだよ、千秋は、昼休み屋上で倒れてからずっと眠つてたんだからな」

「そうか……」

俺は静かに領きながら言った時、保健室のドアが開き、一人の白衣を着た20代前半位の男性が入つて来て、俺の寝ているベッド横まで来た。最初は、保健医かと思ったが、二回目の4月6日の世界では、保健医は、女性だったので保健医では無い事に気付いた。

「あの、貴方は?」

「僕?」

白衣の男性は自分顔を人差し指で指さし、微笑しながら答えた。

「僕は、辻だ。物理の教師をしている。今、保健医の先生は、あの

不良達を病院に連れてついているから、僕が代りに様子を見に来たんだ

病院と言つ、単語を聞いて不良達は大丈夫か？ もしかして、凄い怪我なんかしているんじゃないかと不安が頭の中を巡る。

その表情を読み取つたのか、辻と言つ教師は、

「大丈夫、心配しなくても良いよ、見たところ外傷は殆どないし、軽い脳震盪による気絶みたいだから大した事無いよ、病院に行つているのは念のためだよ」

俺はその言葉を聞いて安堵した。

「そうそう、君は、女の子が襲われるところを助けたんだよね、その女の子が言つてたよ、自分が絡まれているところを助けて貰つたつて」

女の子と言つのは、鬼塚のことだろう、俺の事を氣を使ったのか、そんなの事を言つていたらしい。

「ああ、不良達が悪いみたいだからね、君は何も心配は要らないよ。君は、いきなり頭を押されて倒れたって聞いたけど、問題無いみたいだね、緊張感によるショックが原因だろう。下校時刻までここで休んでいてもいいよ。別に帰る時の報告は良いから」

そう言つと、辻先生は、お大事にと言つて保健室から出て行つた。

第15話 チョップ

辻先生は、お大事にと言つて保健室から出て行つた。

俺は起こしていいた体を倒して、後頭部に両手を持つて行く感じで仰向けに寝て、ふうーと大きく息を吐いた。

隣に居る利一に何気なく目をやると、少し目が合つた所で、利一が目を逸らした。

「んつどうした？」

利一は、両手を膝の上に握り締め、顔を2秒程下に向けてから顔を上げ、いつも利一らしく無い表情を浮かべて、俺に行って来た。「悪いな、千秋。俺が、先生達を呼んでくるのが遅かつたから、なんか大変な事になつちまつて」

俺は、体を起こし、軽く笑いながら、利一に返す。

「そうだな、お前が呼んでくるのが遅かつたから、俺が此処で寝ているんだが テイツ」

俺は浮かない表情をしている、利一の頭を軽くチョップした。

「利一、俺がそれ位で、怒ると思つていてるのか？」

えつ？ と意外そうな顔になる利一。

「別に、お前の所為でこうなつた訳じやないし、俺が勝手にした事だ、気にすんなよ」

そう言つた俺に対し、利一が、

「さすが俺の親友ーーー！」

と言いながら、俺に抱きつこうとして來たので、正当防衛としてさつきのチョップの20倍位の力を右手に込めて、利一の頭に振り下ろした。

「アベシッ！」

利一は、凄い勢いで俺のベッドに顔をめり込んでいる。

「お前は、もう常人として死んでいる。そのキャラを直すつもりはないのか？」

利一がベッドに顔をめり込ませた状態で言っているので、籠もつた声で、

「そしたら、俺が俺で無くなる」

まあ、確かになど、歯切れの悪い納得をして、俺は軽ため息をつく

それから、10分程保健室で、利一と話していたが、体方は少し重く感じる位で特に問題は無かつたので、利一と一緒に帰路へと着いた。

第1-6話 カウントダウン（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第16話 カウントダウン

家に着いて、俺はベッドで仰向けになつて、今日起こつた出来事について、考える事にした。

俺は、携帯を開いて、メールボックスを開き、昼、屋上で不良達に襲われそうになつた時届いたメールを、難しい顔をしながら眺める。

From 不明

Sud 『格闘技』

使用制限10分。ファイルを開き耳に付ける。

「.....」

普段の俺には、男4人を倒す程の力も技術も無い。それなのに、男4人を傷一つ付く事無く倒してしまつた その原因是、「きつとこれだ.....」

一人しかいない自分の部屋に、独りごとが自然とこぼれた。

あの時、このメールに言われた通りにした時に起こつたのは、格闘技の情報が頭の中に一気に流れ来た事。それは、映像、言葉、音声。まるで頭に直接叩き込むような、今まで体験したこと無い感覚。

俺は、ベッドから起きがり部屋の蛍光灯の紐に向かつて拳を放つが、それはいつもの通りのタダのパンチだ。

「やつぱり、駄目か」

思った通り、昼に在つた力は、今の俺には存在していない。使用限界10分と書いてあつたけど、あの時は、10分経たずに頭が痛くなつて、倒れてしまつたが 限界が10分で在つて、その場の状況によつて変わるのだろうか？ あの時、頭が痛くなつて倒れたつて事はそれなりのリスクが在るのかもしれない。

最初のメール

From 不明

Sud がんばれよ。

1日田ミッション。『踏ませるな、助ける』

2回目のメール

From 不明

Sud 『格闘技』

使用制限10分。ファイルを開き耳に付ける。

これを送った人物は、同一人物だろうか？ だとしたら、一体何なんだコレは、2回目のメールは、まるで図ったようなタイミングで送られてきたし、状況から考えれば、このファイルが、あの力を生みだした事になるが、こんな技術NASAでも出来ないだろう、なのに何で……ああ、もうループと言い、この訳わかんない添付ファイルと良い、俺の普通な日常は、何処に迷走しているんだ、早く今まで通りの道に早く戻つて来て欲しいものだ。

携帯画面をメールボックスから、メニューバーに切り替えた時に、一つのメニューが追加されている事に気が付く。

『ファイル』

『写っているメニューをクリックすると、1と書かれた項目の横に『格闘技』と書かれている。さらに、それをクリックすると「タウンロード」しますかの文字が。

これは 何回でもある能力が使えると言う事だろうか？ 試してみれば分かる事だが、また昼みたに、倒れる可能性もあるし、コレを使った時に頭に痛みが走った事を思い出し、使うのはよしとく事にした。

そして、数時間後、今俺は自分の部屋に在るテーブルの上に携帯を開き、デジタル表示の電波時計の画面を表示し、上を向けば、電

波時計のアナログの掛け時計を見る位置で正座し、時間の流れをこれでもかと言つ程感じている。

時刻は、4月6日の23時59分32秒を回つたところだ、この状態でスタンバツテからすでに30分程経つて、両足の感覚は、もはや痺れしか存在していない。

大晦日に新年のカウントダウンをする奴を見るが、今の状況はその雰囲気に酷似しているが、緊張度は俺の方が遙かに上を行く。嫌な汗が頬を滴る。掛け時計の秒針の動く音がやけに大きく聞こえる。

本当に、頼むぞ、これでまた4月6日になつても、俺はもう何をしていいやら全く解らん。などと考えている内にも時間は過ぎ今は、4月7日まで、あと10秒だ。

俺は一人で時計を見ながらカウントダウンを始める。傍から見ればなかなか悲しい光景だろうが今はそんな事を気にしている場合では無い。

「10……9……8……」

自然と、発する数字に徐々に力が込められる

「7……6……5……4……」

全身から汗腺から汗が噴き出す、もう瞬きなどしていない、今俺が目で追っているのは文字盤の数字だけだ、数字が減るにつれて時間が遅くなっているんじゃないかと、想う程1秒が遅い

「3……2……1」

目が見開く、心臓の音が煩いほど聞こえる

「0……！」

周りになんの変化は無い。時刻は、午前零時を指している。俺は携帯の画面で日付を確認すると

「4月7日……」

ただ日付を言つただけなのに、その声には歓喜の感情が籠つている。

勝利の雄叫びを無意識に揚げようとした立ち上がりしたが、3

0分以上ら渡つて正座をしていたせいで立ち上がりがれずに、その場に倒れ込むが、その状態で俺は喜びを爆発させるかのよつて、両手を大の字に伸ばし、4月7日を満喫する。

「ヨツシアアアツーー！ 4月7日だああツーー！」

とつ、何度も叫び声を上げて、10回以上も日付を確認し、足の痺れが無くなつたあと風呂に入つて俺は就寝した。

第17話 4月7日

今は、4月7日の放課後。あの悪夢のよつな、4月6日が終わって次の日だ。

ただいま俺は、部室棟の文芸部の、部室へと入部届けを出しに来て
いる。まだ、始業式から一日しか経っていないのに、入部届けを出
しに来る俺に、文芸部の5人程の部員様達は、とても驚いていらっしゃる。とてもやる気のある新入生とでも思われているのかもしれ
ないが、俺は、文芸部など何をやる部活など知らないし、ぶっちゃ
け、活動するつもりもない。中学3年間と、帰宅部エースの俺が、
何故急に文芸部に入部届けを出しに来たかというと、それは、それ
は、深い深い、日本海溝いや、マリアナ海溝並み深い理由が在る。

始まりは、『1回目』の4月7日に巻き戻る。

4月7日

俺の睡眠を邪魔したのは、目覚まし時計の、つるさんアーヴームでは
無く、一つの着信だつた。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。
「おいおいおいおい、嘘だろ？ また4月6日つて訳じやないよな、
ちゃんと寝る前に確認したし……」

俺は、恐る恐る震える手で携帯を開き、真っ先に、日付を確認す
る。

「4月7日、はあ～びっくりさせるなよ」

と思つて胸を撫で下ろしたのも、つかの間だつた。

時刻は、6時58分。

携帯には、新着メール1件。

俺は、まさかね……と思いながらメールを開く。

From 不明

Sud ファイトー

一日田ミッシュヨン。『部活に入れ』

「ああああ、またかよおおーーーー！ 部活って何だよ、主語をいれろおおおやああ

ジリジリジリジリ！

「つるせーー！」

バン！

「あー、もうついて無い」

ベッドの上で額に右手のひらを向け俯く

「ああ～今日も良い天氣だ

現実逃避をするようにおれは眩いた。

そして、今文芸部の部室に戻る。

ちなみに今は、4月7日を24回繰り返している。大絶賛繰り返し中だ。もう笑えなくない。笑うしかない。

今までの4月7日で俺は、運動部を野球部、サッカー部、テニス部、弓道部、バスケットボール部、バドミントン部、体操部、バレーボール部、卓球部、柔道部、剣道部、空手部を、文化部を、科学部、書道部、吹奏楽部、軽音部、新聞部、放送部、演劇部、漫画研究部に入部してきたが、ことごとく外れたらしく、この最後の文芸部へと、たどり着いた。まるで、シルクロードみ困難な道のりだ。下手な鉄砲数撃ちや当たるつて誰が言つたんだか。

「えつと、それじゃあ、今日から何か読んで行く、色々本が在るか

ら

入部届けを出した俺に、知的っぽい、眼鏡の似合う女子部長が部室に在る本棚を手で指しながら俺に言ってくる。

「いえ、すいませんが、活動は明日からでも、良いでしょうか？」

明日があれば来ますよ。明日があればね。

「はい、分かりました、じゃあ、明日、お待ちしております」

そして、俺は、部活棟を後にし、新入生で恐らくただ一人だけ、
通い慣れたであろう、通学路を通りて、家に帰った。

ただいま時刻は、23時47分。

俺は、ベッドでうつ伏せになり、頭を抱えていた。

これで、学校で貰った、部活案内の用紙に書かれてあつた部活は、
全て回つた。これで、また4月7日になつたのなら、ハ方塞がり。
五里霧中もいいとこだ。

そして、いつものように、俺は、部屋の掛け時計の秒針が文字盤
の12に差しかかったところで、俺の意識は、途絶えた。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。
僅かな希望を握り締め、俺は、携帯を開けるが、

日には、4月7日

新着メール1件。

From 不明

Sud ファイトー！

一日田ミッショソ。『部活に入れ』

はは、笑うしかないな、もう入る部活は無い。

俺は、25回連続同じ朝食を食べ、何の策も無いまま、家を後に
した。

学校に着くまで、色々と考えていたが、これといって、良いアイディアなど浮かばずに、教室に入つても自分の座席に着いても俺は、頭を抱えていた。教室の時計を見ると、いつもよりも大分早く、学校に着いた事が分かった。家を出る時間は、いつもよりも少し早い位だったが、タイミングが良かつたのか、今日は一度も信号に引っかかる事無く学校に着いたため、それが原因だろうと、意味の無い考察をした。

担任に貰つた、部活の案内の用紙に、意味は無いながらも、今まで入つて来た部活の名前を赤いマーカーで横に塗り潰す。

24回目が、文芸部。失敗と。

見事に赤く染まつた用紙、まるでスタンプラリーをコンプリートしたかのようだ。全く嬉しくは無いが。

俺が、頭を抱えている時、隣の席に座つている一人組女子の会話が耳に付いた。

「ねえ、知ってる？ 駅前に在つたアクセサリーショップ、久々に行つてみたら、もう潰れてたんだけど」

「ああ、あそこの、お店ねえ、余りお客様さん入つてなかつたぼくて、去年の11月にもう閉店してたよ」

などと、言つ何気ない会話が聞こえてきた。この話を聞くのは初めてだ、ああそうか、今日は少し早く着いたからか、今までも同じ話しをしてたのかな

俺の頭の中で、何かが、動いた気がした。こんがらがっていた口一упが、少し解けたような、そんな感覚だ

在つた？ 潰れた？ 去年？ 入つて無かつた
もしかして

俺はホームルームが終わった後に、職員室へ行き、気になつた事担任に、聞いた。

「先生この部活の案内の用紙って、もしかして、今、活動している部活しか載つて無いんぢやないですか！？」

俺は、用紙を見せながら、担任に問う。

「ああ、確かにそうだな～この用紙には、今、活動している、ところしか、書いて無いな」

「人数が居なくて、活動をしていない部活だったり、前まで在つた部活つてなにかないでしようか？」

「ああ、確か、それなら一昨年に部員が居なくなつて、休部状態の部活が一つあるぞ」

思い出したように、手を叩く担任教師。

「それつてなんですか」

「オカルト研究部だけど、今は、部員1名つてどこかな？」
付けくわえるように言つ、担任。

「部員1名？　一昨年から休部状態だったんですね？」

「それなのに、何で、部員1名なんだろうか？」

「ああ、昨日、早々俺に、オカルト研究部の入部届けを出した奴がいるから、事実上は、今のところ一人だ」

「そう言う事か。

「その一人つて誰ですか？」

「ソイツは

「

第19話 オ力研（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第19話 オカ研

そして、放課後。ただいま部室棟の、二階の一番奥の部屋のドアの前に来いる。じいが、オカルト研究部の部屋らしい。普通、部室の部屋の上には、文芸部とか、書道部とかのプレートが付いているが、この教室にはそんなモノは、付いていない。まあ、一昨年も前に休部したんじゃ仕方無いが、だから今まで気が付かなかつたんだ。つまり俺は余りの部屋か、倉庫かと思っていた。

ドアの前に立つていると中から、物音が聞こえて来る。どうやら、その昨日入部届けを出した奴は、中に居る見たいだ。

俺は、軽く、コンコンとノックをすると中から

「はい」

と言ひ、聞き覚えのあるような声が聞こえて来た。

まあ、一応、作法として、失礼しますと声をかけ。中に入ると、そこに居たのは 鬼塚 千尋だった。

部室は、奥行き5メートル、幅が3メートル位の部屋で、奥には窓が付いており、今まで回ってきた部室と、ほぼ同じ造りのようだ、違うのは、一昨年も前に廃部になつたせいか埃の匂いがする。真ん中には、長机を二つくつ付けて並べてあり。その左右には、数個のパイプ椅子が収まっている。そして、鬼塚は一番奥、机の端にあるパイプ椅子に座つて、分厚い黒い本を真ん中よりも先の所で開いていた。鬼塚の座つている近くの机にだけ、埃が付いて無いのは、鬼塚が自分場所を確保したからだろう。

読んでいた本を、パタッと閉じ、顔を上げ鬼塚は、

「あら、何のようかしら、昨日ヒーローのように現れ、頼んでも無いのに勝手に私を助けて、拳句の果てにいきなりその場に倒れ込んだ、愛田君じゃない」

俺の苗字を知っていた鬼塚。同じクラスだからかなのか、昨日在った一件で名前を覚えたのか、どっちだろうと考えると、きっと後

者の方だろう。そして名前を言つオマケ、いや、名前よりもそっちが本命のように言葉の矢をこれでもかと飛ばす。良くこんなに舌が回るなコイツは、いや、関心すべきは、そこじや無く、そこまで面識のない人間に、そんな言葉を浴びせられるモンだ。

「ああ、名前を覚えてくれてありがとう」

少し、皮肉をこめて、だが悟られない程度に俺は、言った。

「いいのよ、別にお礼なんて、大した事じやないわ、類人猿の項目に一つ足しただけだから」

俺は、人間じやなくて、靈長類の一種としか、アイツには見えて無いのか！？

「あら、冗談よ、本気にしないで欲しいわ、例えアナタがどれだけ、頭が悪くても、この学校に居るんだから、ホモサピエンスは、名乗つても良いでしょう」

あんまり、変わつていらない気がするのは、俺のオツムが足りないせいなのだろうか。

「でつ、要件は何かしら？ 見た所によると、その紙に関係しているのでしよう？」

俺の右手にある、入部届けの用紙を田をやり聞く。

「ああ、そうだ、これを」

俺の言葉を止めて、鬼塚が、

「言わなくとも、分かるわよ。果たし状ね、いい度胸しているわね。昨日の私の態度が気にいらなかつたから、暴力での解決を図るつもりね、以外に、男らしいのね、愛田君。流石、大の男4人を返り撃ちにするだけあるわね」

「なんで、俺がお前に果たし状を渡さなきやいかねえんだよー。」

「あら、そうなの残念ね」

何だコイツは、そんなに俺が気にくわないのか？

「これだよ、これ」

俺は、腕を伸ばし入部届けを椅子に座っている鬼塚に見せつける。「俺は、ここでの、オカルト研究部に入りたくて、此処に来たんだよ」

「あら、 そうなの。つまり私の下僕になりたい、 そう解釈してもいいかしら」

「何故そうなる…」

俺とコイツでは、日本語の意味が異なつていてるのか、 そう勘違いしてしまう。

「私が部長だからよ。 嫌なの？」

不思議そうな顔の鬼塚。 もう自分が部長だと、決まっているのは、椅子取りゲーム方式で早い者勝ちなのだろう。 まあ俺には、興味の乏しい称号だが。

「嫌に決まつているだろう！」

そんな、ドMな趣味を俺は、当たれ前ながら持ち合わせていない。

鬼塚は、真剣な顔、鋭い視線で、

「だったら、早く、ここから立ち去りなさい」

声のトーンが、いや空氣までも変わった。まるで、夏から冬いきなり変わったような 朝の陽ざしを見ていたら、突然、夜空になつたような温度差。 その鬼塚の口調は、今までが、威嚇だったのなら、威圧に変わったかのように……さつきまでの「冗談半分の口調じや無い。 ここから先に近づくな、 そう警告しているかのように、俺は聞こえた。

第20話 眼球ＶＳ本角

「これは、警告よ、愛田君。これから先、楽しい学園生活を送りたいのなら、私に関わらない方が良い。それがアナタの為にも、私の為にもなるのよ」

身の危険を感じるような、剣呑な目で俺を睨みつける鬼塚。

「なんでそこまで他人を拒む

俺がそう言いかけた時、素早くパイプ椅子から立ち上がり、タツ！ と床を蹴り、一瞬で俺に近づき、あの黒くて分厚い本を俺の左頬を叩がけ、床と平行にまるで、ビンタをするように、右手を振るう。

凄いスピードだったが、本は、俺の左頬に触れるギリギリでピタッと、止まった。これも一種の言葉の暴力なのか！？

「こういつ意味よ、分かった？ 私に近づかない方が良いという意味が」

汗が出た。冷や汗の言つモノだらう。俺は、全く動いていない。いや、動けなかつた。その状態で沈黙の数秒が続く。

「あら、どうしたのかしら？ 愛田君。昨日のあの動きからして、これくらいの事、避けるなり、防ぐなり出来たと思うけど。避けるまで無いって事？」

少し、口元を曲げ怖い笑顔で喋る鬼塚。

そして触れていなかつた、本が俺の左頬に当たり、

「答えはでたかしら？」

質問しているようだが、コレは命令だ。さつきまで当たつて無かつた、本の無機質の冷たさが、恐怖心を与えるのに、一役買つている。

睨みつける鬼塚。俺はその眼を黙つて見た。

人間の行動には、大概何か意味が在る筈だ、この行動は俺をこの部に居れない為だろう。だが、ここまで行動をする為の何かしらの意味が在る筈だ。コイツの言動、行動は、人を拒み拒絶している。何故そんな事をするのか　？　その仮説を俺は『立てて来る』

「あのさ、毒の持つ生物って派手なのが多いって知ってるか？」

「なんの話よ」

頬に触れる本にさらに力が加わる。痛くは無いが軽く頬が凹む。「まあ、聞けよ。それって、俺には毒が在るだから近づくなって言つているらしいんだ」

「知つているわよ、そりやつて、自分が生き残る為でしょ」

「俺は、違うと思つんだよな～自分に毒が在るから、危険だから、危ないから、傷つけたくないから、近づかないで欲しこつて言つているじゃないかと思うんだ」

「だから何？　貴方何が言いたいの？」

「お前はさ、そういう言動や、行動で自分には、近づかないで欲しいと思つていてるんじゃないのか？」

「！？　そんなの、貴方の思い込みでしょー！」

その言葉を聞いた鬼塚の瞳孔が開いたのが分かつた、相変わらずの強気の態度だが、表情少し悲しげに見える。

そう、これは俺の思い込みだし、きっと今コイツは、とても迷惑していると分かる。だけど、こんな悲しそうな顔をしている女子を

放つておくのは、心が痛むし、勝つと分かっていたとはいえ、不良に絡まれた女子を黙つてみていた事に、罪悪感が俺の中には在った。

俺は、鬼塚が本を持っている右手の手首を軽く持ち腕を下げて、俺は近くに在った、パイプ椅子へと腰掛けた。

「話してみろよ、出来る事なら協力するぞ」

俺が言葉を発し終わる前に、鬼塚が、座っている俺に向かつて踏みこみ、バスケット椅子の足を蹴り飛ばし、俺の体制を崩れそして、俺の両肩を掴んで押し倒し、俺は仰向けになるような形でその場に倒れた。

鬼塚は仰向になつている俺に馬乗りになり、持つていた本の角を俺の左眼球に触れる寸前の所まで持つてきた。

第21話 5秒

鬼塚は仰向けになつている俺に馬乗りになり、持つていた本の角を俺の左眼球に触れる寸前の所まで持つてきた。

一瞬の出来事。最初は、なにがなんだか分からなかつたが、左目には黒モノが見えるだけだ。状況が分つたのは、残つた右目が在つたおかげだ。

「立ち去る気になつた？」

冷たい声で、鬼塚は良い放つた。

しかし俺の言つ事は決まつっていた。何故だか解らない。コイツとはまだ他人の筈なのに、

「俺は、お前を助けたい」

「アナタ迷惑つて言葉知つてる？ 潰されたいの？」

「潰したいのか？」

淡々とした会話が続く。

「……出来るわよ」

そう、言つた言葉と一緒に、左目に映る、黒いモノは、震えてている。

「じゃあ、一つかけをしないか？」

「かけ？」

鬼塚は、眉を少しだけ動かす。

「ああ、俺は、これから5秒数えたら、頭を一気に起こす」
動搖した顔で鬼塚が、

「それじゃあ、目が」

「そう、潰れるよ」

「お前が、その本を動かさなければ、お前の勝ち。動かしたら俺の勝ちだ」

「！？」

何を言つているだコイツは、と思つてゐる事が表情から読みとれた。まあ、俺だつて逆の立場だつたらそう思つ事だろつ。「お前が勝つたら、俺は黙つて、入部を諦める、そして、俺が勝つたら、入部を認めて貰うのと、お前の他人を拒む理由を教えてもらおうか？」

どうする？ と軽く挑発的な口調で付け足した。

「いいわ、乗つたわ、そのかけ」

少し口を曲げ、嗤いながら鬼塚は答える。俺も嗤つ。そんな事出来る訳ないだろうと思つてゐるのだろう。

そして、俺は少しの静寂の間を置き、軽く深呼吸をしてから、カウントダウンを始めた。

「5 4 3 」

震える、首。力が入るか分からぬ程震えている。だが、もう後には引けない。そして、左目に映る小さな黒いモノも俺と同じように震えている。怖いんだ、どちらも、俺も、鬼塚も。

「2 」

何故ここまでするのか？ 理由は解らない。最初は、ただ単にループを回避したい、の気持ちでこの場所に来ていた。でも今は、そんな理由では無いと思う。そんな単純な話しへは無く。もつと複雑な何かが俺を動かしている。

「1 」

「0 」

俺は、0と言つた瞬間首を起こした、本の角は、俺の頬をなぞる

様にしてかすって行つた。鬼塚が、ギリギリで本を動かしたんだ。

「「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」」

部室に、二つの粗い呼吸音が響く。俺は、一応左耳を触つて言った。自信ありげに、でも、たどたどしく。

「俺の勝ちだな」

「どうして、そこまでするの？ 赤の他人でしょう。」

呆れた様子で言った、軽く涙目になつていた。でも嬉しあわしそうに、様々な感情が籠つている。

「しらねえ

脱力的に、短く返した。

第22話 理由

「アナタみたいな馬鹿初めて見たわ、アナタはお人よしの良い人?いや、俺は此処まで来るのに、オカルト研究部の存在を知つてから、『12回』もかかっている。つまり今、『この4月7日は、26回目だ』。

最初に、眼球寸前に本の角を突きつけられた時は、すぐに、その場から逃げだしてしまった臆病者だ。それでも、俺は続けた、オカルト研究部に通つた。最初は、ループ回避という名目で通つていたが、今ではきっと、他の感情が動かしている。確かに俺は、コイツ、鬼塚の事をほとんど知らない。けど、俺は助けたいと思つた、この他人を拒絶する少女を。俺は良い人でも何でもない。勝てると勝つていたとはいえ、女の子が、不良に襲われている所を黙つて見ていた時も在つたし、ここまで持つてくるのに12回もかかってしまつている。そんな奴を良い人と呼ばれる事に俺は少し胸が痛んだ。

鬼塚は観念したようで、馬乗り状態を解くと、そこに座れとでも言うみたいに、本の角で長机の近くに在るパイプ椅子を指す。

それを読みとつた俺は、そのパイプ椅子に腰かける。鬼塚は、俺の方を向いたまま、立つたままだ。

「仕方ないわね……何処から話せば良いかしら」

鬼塚は、一呼吸を置いて話し始める。

「全ての始まりは、5年前のクリスマスイブの日。あそこから、始まつたわ」

「5年前のクリスマスイブ。12月24日、その日私が見たのは、真っ赤なサンタクロースじゃなくて、真っ赤な炎だった 出火原因はストーブの消し忘れらしいわ。それで私の家は、炎に包まれたわ。家は全焼。両親は一人とも焼死。家族で私だけ、通りかかった人に助けられ、生き残った。そして、これが両親の形見」

鬼塚は、黒い本を手にとる。

「科学な好きな私が、物理の教師をしていた父親に頂いた本。コレなんの本だか分かる?」

俺に本の表紙を見せるが、英語で書いて在り俺には読めない。

「これは、相対性理論、一般相対性理論、特殊相対性理論を訳しました論文書 それから両親が亡くなつてから、私はこの本必死に読み漁つたわ、毎日、毎日、毎日。何でかかる? 愛田君」

俺は、数秒考えたが、分からなかつた。そりやあ、相対性理論なんて名前は聞いた事はあるが、具体的にどんなものまでかは、俺には分からぬ。

鬼塚は、窓際まで歩くと、開いていた窓から流れ込む春風を浴びて少し、腰上位まである長髪を靡かせながら、「私は、過去を変えるの」

決意の表れ、その感情が読みとれた。

「私の目標は、情報、または、人間が過去へ行く事の出来る、理論を完璧に証明して、その技術の確立をし、あの日の出来事を無くすこと」

「そんな事、出来るのか?」

「出来る、出来ないじゃ無くて、やるのよ。愛田君、ニユートリノつて言う粒子を知っているかしら?」

確かに、数年前に話題になつた事がある名前だな。

「ニユートリノという粒子は、光よりも速い粒子として、発表されてこれを使えば情報を過去へ送る事の出来るじゃないかと、示唆されてる。私は、それを始めとする理論を完璧に確立するの」

「コイツのやりたい事は、大まか理解出来た、だが、

「それと、お前が他人を拒む事と何が関係在るんだ?」

「鬼塚が俺の顔を離す。」

「私は、この本に書いてある理論を、3年かけて理解した、死に物

狂いでね

鬼塚は、遠い眼で窓の外を見ながら、

「変わり者は、嫌われるのよ」

悲しそうな声だった。悔しそうな声だった。

寂しげな声だった

第22話 チャイム

「変わり者は、嫌われるのよ」

悲しそうな声だった。悔しそうな声だった。寂しげな声だった。
変わりモノは、嫌われる。確かコイツは、5年前からこの本を読み始めたんだよな、てことは、小4 变わりモノは、嫌われる。
それは知っている。集団に染まらない者。周りと違った者。恵まれすぎた者。何かと、理由を付けては、嫌われ、疎まれ、蔑まれ、嫉まれ、恨まれ、そんな奴が多くなるにつれて連鎖し、さらに拡大する。小4であんな本を読み始めたら、周りから浮くのは、火を見るように分かる。

「それでも、仲の良かつた友達は居たけど、私と一緒に居るだけで、周りから白い目で見られるようになつたわ」

「じゃあ、お前は、友達の事を想つて、自分から他人を拒絶するようになったのか？」

その問いに鬼塚は、

「違う、私は、自分の為に拒絶したの、邪魔だつたから、知識を得るほうが大切だつたから！」

珍しく感情的な声になつて否定する鬼塚。だが俺には、それは嘘を言つてゐるしか聞こえ買つた。別に他人の嘘が見破れるとかそんな能力など持ち合わせちゃいないが、鬼塚の表情、声、言動からそう解る。

「嘘だろ」

あつさりと返し。続けて俺は、

「お前それが他人の為にも、自分の為にも、なると思うなよ」

鬼塚が、友達の事を想つて、拒絶をすれば、その友達の周りから白い目で見られる事は無いだろう。だけど、そうした事によつて友達は、悲しんだ筈だ、それを選んだ鬼塚も。この方法じや、誰もハ

ツピーノードは迎えられはしない。その事は、他人の俺よりも、中心の人物である、鬼塚が一番解っている筈なんだ。俺に言われるまでも無く。

数秒間、部室に沈黙が生まれた。

「だつたら、どうしろつて言つの？ 友達の事も氣にもせずに仲良くしていれば良かつたつて言うの！？」

確かに、鬼塚の行動は、正解とは言えない。でも、赤の他人の俺に間違つていると、言う権利も無いかもしね。現に今の俺に、その時どうしたら正しかつたのか、その答えも見つからないが、だが、今これだけは言える。

「確かに俺には、その時の正解は、解らないけど 今もそれを続ける必要は無いだろ。友達欲しいんだろ？」

鬼塚は、その言葉を聞いて固まつていた、いや正確には、頭の中で色々な考えを巡らせていたのかも知れない。
そして、数秒後、鬼塚の口がそつと開く。

「欲しく無い訳無いじゃなし……」

「じゃあ、部員として友達として、この部に迎えてくれないか？
白い目なんて気にする事じやないし、今じゃ、その時と環境も随分違うだろうし、逆に見られても、見下してやればいいさ。ソイツらが嫉妬する位に、楽しく過いせば良い」

言い終わつてから、長い沈黙が流れた。でも実際には、10秒位しか無かつたよだが、時が止まつているかのように長く感じた。きっと鬼塚も同じが、それ以上の時間を感じていたのかも知れない。
そして、吹つ切れたように、今まで繋いで在つた枷が千切れたよう、鬼塚は、笑つた。嗤つたんじやなく、笑顔で。

「あはははははは。本当にアナタは馬鹿みたいね、訳の解らぬ自論を掲げて、私の今までして來た事を否定するなんて」

窓際から俺の元へと、歩いていきながら、机に在つた入部用紙を掴み、俺の顔の前へと着き出し。

「解りました、入部を認めましょ

う 宜しく。愛田君」

その瞬間、止まっていた時が、動き出しかのように、チャイムが鳴り響いた。いや、きっと本当に時間が動き出したんだと、俺は感じた。

第24話 一時停止

それから、俺は、机を挟んで座り取りあえず会話を始める。

「で、貴方は、なんで、オカルト研究部に入ろうと思ったのかしら？」

鋭い質問だ。だが、此處で、ループしているからなんて言つても、アレなので、

「いや～、SFとか都市伝説が好きだからだよ」

鬼塚は、フーンと頷いて俺を見る。余り納得は、していないう�だ。

「まあ、良いわ」

「じゃあ、お前はどうしてこの部に入部したんだ？」

「まだまだ、タイムトラベル、時間移動、なんて事は、世間一般的に見て、オカルト扱いだからよ、これから色々と調べるのに、学校の施設を色々と使いたいし、私は、お金が余りないから、新しい論文なんかが出たら、部費でまかなうつもりだったのよ、まあ、一番の理由は、人がいなかつたから、オカルト研究部は、実際はたまたまだつたのよ」

お金が余り無い。両親が居なくては当たり前のだろう。

「成程な……学費とかはどうしているんだ？」

嫌な質問だつたかも知れない、口が滑つたと言つてから思つた。

「私は、貴方とは違つて優秀だから、学力特待で学費はかからないの。この学校を選んだのはそれが理由よ」

この学校にそんな制度が在つたとは知らなかつた。まあ、俺には関係ないが。

「お前は、頭が良いいんだな」

「そうよ」

自信満々に返すが、俺は「ヨイツが気付いていない、重要な事実を知っていた。そりや、20回以上も4月7日を繰り返しているから、知つた事だが。

「お前、知らないだろ?」

「何の事かしら?」

「正式に、部として活動するには5人は必要なんだと」

「……」

硬直していた。まるでテレビのリモコンの一時停止を押したかのうに。よもう2度と見れないかも知れないな。

「愛田君、アナタなんとか出来るかしら?」

「なんとかするわ、楽しくやるわ、オカルト研究部」

「ええ、でも無理しなくても良いのよ、名前だけの幽霊部員でも構わないから」

「いや、ちゃんと、部員を集めるよ」

「そんな事を話して、俺のオカルト研究部の初の部活動? は、終了した。」

そして、ただ今。我が家の一階の一室である自分の城のベッドに腰をかけて、掛け時計を見上げる。時刻は、日にちをまたいで、零時を数秒程回ったことだ。絶対の確信が在つた訳じゃないが、思つた通り、ループは起きなかつた。

そこへ、手元へ置いておいた携帯かメールを着信したらしく震える。メールを開くと、

From 不明

Sud

ループ終了

と書かれていた。思わずそのメールを見て、苦笑する。

ループ終了か……素直に喜べないな。これで終わつたとは思えない。行動には、大概何らかの意味が在る筈だ、4月6日、7日の出来事の意味は、俺にはさっぱりだ。てつことは、これから何かの意味が生まれて来るかもしれない。

そんな事を考えてから俺は、眠りについた。

第25話 4月8日

次の日。4月8日。

その日の朝は、久しぶりに田舎まし時計で起きる事が出来た。つまり、普通に4月8日を迎える、なおかつ、あの宛先不明のメールが来なかつた事になる。

リビングで朝食を食べていると、いつも以上においしく感じられる。なんせ、26回も同じ朝食のメニューだったから、オカズの焼鮭がとても美味に感じる。

そんな事を考えて食べている時、テレビの音声に耳が行く。俺の住んでいる町の名前が聞き慣れた女子アナの声から出たからだ。

内容は、昨日の夜この町で自動車の破損があつた事。ただの普通の破損ならば、こんな全国ニュースで伝える事じゃないだろうが、破損の仕方が異常だつた。人通りの少ない路地に止まつてあつた普通の黒色の乗用車が、1時間目を離した隙に逆さまになつていたと言つのだ。

ニュースの映像だと、イヤの面が上になつていて、車の屋根が潰れて地面に着いている、まるである程度の高さから、落としたようだ。なかなかシユールな映像だ。どうやら重機を使った形跡も無く、警察もどうしたらこうなるのか捜査中らしい。

まあ、俺的にはそこまで興味を惹かれる内容では無かつた。ここ一日でもっと奇妙な体験をしていいからだ。もしかしたら、タモ〇さんとの番組に投稿したら、採用されかねないレベルかと思う。それに、駐車禁止の場所に駐車していた、運転手も悪いんじゃないのかと、軽くツッコんでみる。

家から出で、すでに通いなれた通学路を自転車を走らせる。

高校一年生の新入生。

学校三日目にして、登校は27回目。

新鮮さなんてモノは、微塵も存在していない。

学校の校門の手前で来た時、俺は自転車を一旦止めた。理由は、『また』あの子を見つけたからだ。俺の来た道とは違う方向の道路でたたずんでいる、一人の少女。髪は鬼塚よりも短く、それでも、背中の3分の1位には伸ばしている女の子だ。校門からは、30メートル位は離れているだろうか、その子はウチの高校の制服を着て、道路の端で、学校を見上げていた。

俺はその子に見覚えがあった。別に名前を知っている訳でもなく、クラスが一緒と言う訳でも無い。勿論話した事も無いけど、知っていた。それは、4月7日。俺が26回繰り返したあの日、毎日？毎回、今居るあの場所で立っていた女の子だからだ。

俺がループしている時に分かつたのは、基本的に何もしなければ、俺の周りで起こる事の変化は無いと言つ事、例えば、クラスの誰かが話している内容や、行動に変化は殆ど見られなかつた。変化がよく見られたのは、俺とよく一緒に居た利一と、鬼塚位だ。利一に話す話題を1回目と2回目で変えれば当たり前だが、利一の返す言動、行動は変わる。鬼塚に至つてもそうだつた。どうやら前回の記憶を持つてゐる俺が干渉する事により、世界も変わつてくるみたいだつた。前回の記憶を持つてゐるから、全く同じ行動をするのは不可能だが、もしそれが可能ならば、きっと全く同じ事が起つたるだろう。

あの女の子も周りの人達同様に、4月7日、俺の知る限り26回ずつとあの場所へ立つてゐた。だからこそ俺は、あの場所に立つているだけの行動に違和感を覚える事が出来た。俺が学校に早く着こうが、ホームルームギリギリ間に合うかどうか分からない時刻に着いても、あの女の子は、あそこに立つたままだ。俺の予想だと、学校のすぐ近くまで来ているが、学校には、『入らない』そう思つた。これは、おかしな出来事なのだろう。『来ているのに』、『入らない』、おかしいとは、思ったがそこまでは、気にはしなかつた。それがあの女子の4月7日のする事なのだと思つたからだ。その日だけ、たまたま、そんな日だつた。そう思つた。でも今日も同じ場

所に立つて校舎を見上げている、その少女は、こちらに気が付いたのか、一度俺の方を見て、学校から離れて消えて行った。

高校の授業と言つモノは、難しい。特に英語や数学などの項目は、俺にとってのハテナのオンパレードで、その言語や公式が睡眠導入剤に感じられる。今は、午後の授業に突入し、あと1時間で今日の勉強は終わり、つまり6時間目だ。

この授業は誰一人として、教科書を開いてはいない。別にクラスで授業放棄をしている訳ではなく、担当の教師が開かなくても良いと言つたからだ、その教師は白衣を着こなしている。辻、4月6日に保健室へ俺の事を見舞に来た、まだ若い男性の新任教師だ。

物理の授業は、コレが初めてと言つ事もあり、最初のうけが重要かと考えてか、教科書には載つていらない内容を話している。

教卓の後に立ち、教卓に両手のひらを付けて、若干前屈みになりながら、話しをする、辻。

「え、今日は初めてという事もあり、皆が興味を湧くような話をしたいと思います」

若手教師らしく、元気の良い声で言つ、辻。

「例えば、今。皆の机の上に輪切りのレモンがあるとする、とても酸っぱそうなレモンだ。そう、イメージすると、唾液の量が増えてくると思う。これは条件反射と言つて、君達がレモンは酸っぱいと知つてているからこそ、起きる現象だ。もし、レモンを知つてている人にレモンの写真を見せたら、唾液が分泌されるだろうが、知らない人に見せてもそれは起こらない、条件反射とは、先天的に宿つてゐるモノじゃなく、後天的な影響によつて起きる現象だ」

黒板に黄色のチョークでレモンの絵を描いたりと、中々クラスの心を掴んでいる。

「このような、人間の行動は、脳の電気信号によつて行われている。このクラスには居ないとは思うけど、世界には、面白い人達も存在

している。一つの刺激で複数の感覚を得られる人達だ、例えば、文字を見て色を感じたり、歌を聞いて味を感じたりする人達も居る、この現象は、『共感覚』と言うんだけど、まだ解つて無い事も多いんだけどね。つまり、人間の脳は、複雑で色々な事を感じ易と言う訳だ』

何故が、その時、辻と目が遭つた。

「ここからは、僕の仮説ですが、人間は五感に頼つて、情報を得ているけど、それは全て脳の中の電気信号によつて行われるつてさつきも言つたけれど、電気信号さえを完璧に解明すれば、一つの情報で幾つもの情報が送れるかも知れないと言う訳、例えば歌や曲を聞いて、楽しくなつたり、悲しくなつたりするのは、個人差はある種の電気信号を操つていると言つても良いかもしない。これをもつと複雑にして、個人の脳に干渉出来るようにすれば、曲ならば、音、リズム、テンポなどの事を調整すれば、頭の中にダイレクトで様々な情報が送れるようになり、聞いた人に命令なんかも出来るようになるかもしねー」

まあまあ、好評を得た、辻の授業が終わり、放課後。俺は、オカルト研究部の部室に赴き、今、いたる所に埃が溜まつてゐる、この空間を部長と共にジャージ（体操着）に着替えて掃除中である。

第27話 3人目の部員

まあまあ、好評を得た、辻の授業が終わり、放課後。俺は、オルト研究部の部室に赴き、今、いたる所に埃が溜まっている、この空間を部長と共にジャージ（体操着）に着替えて掃除中である。ジャージ姿で床を箒で穿いている鬼塚が、

「ところで、愛田君。部員の方はどうかしら？ どうやら担任に聞いてみたら、部費を申請するには、5人以上を揃えて、正式に部として認められないといけないらしいくて」

俺は汚れが溜まった窓を雑巾で拭きながら、

「ああ、取りあえず今のところ、一人は決まってる」

「そう、一体どんな方がいらっしゃる、愛田君の友達？」

「まあ、一応そうだな」

そつそつなく俺は返す。

「それじゃあ、余り期待はしない方が良いわね」

「ああ、期待しないほうが良い」

そんな事を話していると、廊下を走つて来る足音が聞こえてきた。
「来たか」

そして、勢い良くドアを開ける、掃除機を持つた利一が居る。

「おーす。千秋、持つて来たぞい！？」

その姿を見た、鬼塚は、素早く利一の左に移動し、箒の持つ棒の部分を利一の首へと潜られ、平静な口調で、

「愛田君、大変よ、不法侵入だわ。いますぐ正当防衛に移らなくちゃいけないわ」

驚愕した顔で、俺の事を見て、

「ちつ、千秋、何だコレ、掃除機じゃなくて、葬式だったのか！？」

「……、」

「……、」

「……、」

まるで、突き刺さるような、冷めた目を送る俺と鬼塚。
「愛田君。この人、綺麗に消していいわよね？ 掃除の時間だし」
顎の下に潜らせてある、箒の柄の部分を首に当て、力を込め始める鬼塚。

「まあ、待てよ」

俺は、二人の元へ近づき、鬼塚の箒を利一の首から離すと、利一を長机の前へと連れて行き、学生鞄から、入部届けの用紙を長机に置く。

「なにコレ？」

入部届けには、すでにオカルト研究部と書いてあり、記入欄の残りは、名前の判子のみだ。

「利一、お前に選択肢をやる。これから俺の言つ言葉に、『ハイ』か『分かった』、『イエス』で答える」

「えっと、それって、選択肢と言つのか……？」

俺は、軽く笑いながら、

「選り取り見取りだろ、好きなのを選べ。なんなら、『OK』、『了解』、『把握した』、も付けくわえてやるぞ」
利一に長机に置いてある、入部届けの用紙を指さし、
「つまり、この部に入れど、そつ言つて居るのか？」

「ああ、そここの紙に名前を書いて、この朱肉を使って押印をしろ」「そう言って、家から持ってきていた、朱肉を利一に見せる。
「千秋も入つてんの？」

「まあな」

「じゃあ、俺も入るか」

あつさりと了承し、名前と書判を記入した利一に、利一に雑巾を渡す、

「ん？」

「今、部室の掃中だから、お前雑巾がけな。俺、掃除機使つから「利一が持つて来た掃除機を掴み、鬼塚の方に行つて、利一の事を親指で指さして、

「アソシが、佐伯利一、俺の悪友だ、取りあえず部員3人目つて事で、ヨロシク頼むわ」

それを聞いた鬼塚が利一の顔を見て、

「としかずね、ダイオキシンみたいな名前ね」

「はあ！？ 都市ガスつて事か！？」

利一が素早く振り向く。

「あら、お気に召さなかつたかしら、だつたら、オゾンか、硫化水素の方かよかつたかしら」

はは、良し勝つたな、俺は、最初に靈長類つて言われたからな、氣体ならコツチの方が上だあ？ アレ？ 何か悲しいな、なんだろう、この複雑な気も持ち……。

ぎやーぎやー利一も言つていたが。まあ、なんとかなりそつか。

俺は、二人の言い争つている姿みてそう思った。

そして、下校時間寸前までかかつて、今日中に部室の掃除を終わらせが出来た。

部室、学校を後にして、鬼塚とは途中の道まで一緒に帰り、これから利一と、多分この国で一番フランチャイズチェーンとして展開しているであろう、ハンバーガーショップへ行く事にした。鬼塚にも『一緒に行くか？』と誘つて見たが、『いいえ結構です』と言つて帰路へと着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

高校生の時間外労道（じかんがいろうどう）

2011年12月31日18時50分発行